

被服の着装効果と顔の形態的因子との関係 についての研究 (第2報)

柄原きみえ・斎藤一枝・壁谷久代・畠山妃美子

Studies on the Relation between Properly Dressed Clothes and Morphological Factors of Face (II)

K. TOCHIHARA, K. SAITO, H. KABEYA and H. HATAKEYAMA

緒 言

被服の着装効果は、着衣基体である人の身体的因子と被服との適合関係によってその価値が定められる。即ち被服の色、柄、材質、デザイン、サイズ等が着装者の個性に適合しているか否かによって機能面、審美面からの価値が評価されることは、一般に知られており重要視されている。しかしその評価は趣味、嗜好及び経験にたよっているのが現状である。本研究では個性の要素の1つである顔の形態的因子をとりあげ、被服の着装効果との関係を審美面から追求し理論的に明らかにしようとするものである。

先ず研究の第1段階として、眉及び眼の長径、幅径、角度を計測し、標準偏差を用いて類型化を試み、第1報を本学紀要第25号で報告したが、今回はこれらの資料を用いて個性との関係を知るための官能検査を行なった。

なお今回の研究は個性と被服との関係を検討するための基礎資料を得るためのものであり、これらを含めて今後の研究結果を被服教育に、また既製服の選択購入の場に役立てたいと考えている。

方 法

本学短期大学生 222 名を被験者として顔を中心に撮影し、1/2 大に引き伸した写真を用いて間接計測をした。撮影は昭和49年から52年までの間に行なったものであり、撮影方法や計測方法は既刊の紀要に詳細に述べたので、今回は“図1”により簡単に説明することにした。先ず眉は眉頭、眉尻間の投影距離 a と眉幅の中央を通る実長とを計測して眉長とし、眉の最大幅を眉幅とした。また眉頭を起点とする水平線と眉頭、眉尻間を結ぶ線との角度 c を計測し、水平線に対して眉角度が上の場合、つまり上り眉の場合にはプラス、眉角度が下、つまり下り眉の場合にはマイナスの記号で表わすことにした。

眼は眼頭、眼裂間の投影距離 d を眼裂長とし、

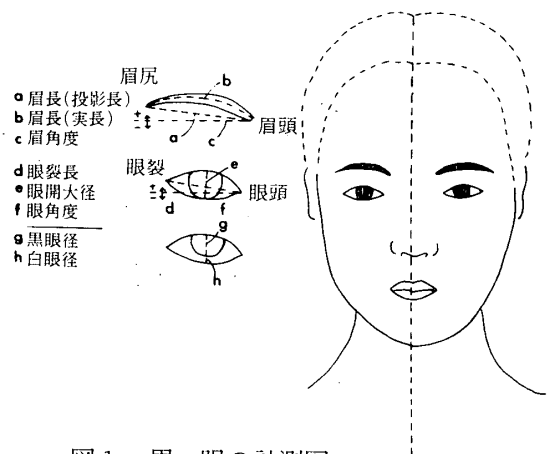


図1 眉、眼の計測図

眼の最大幅 e を眼開大径とした。なお眼頭を起点とする水平線と、眼頭、眼裂間を結ぶ線との角度を眼角度 f とし、水平線に対する眼角度が上の場合には上り眼、下の場合には下り眼として眉と同様のプラス及びマイナスの記号で表わすことにした。

なお俗に言う三白眼については、黒眼の位置を把握するために、眼開大径位置における黒眼径 g 及び白眼径 h を計測して眼開大径に対するおのおのの比を、またプランニメーターを用いて眼の総面積及び黒眼面積を計測し、両者の面積比を求めた。

結 果

1. 眉、眼の計測値

先に述べた計測方法により、眉及び眼の長径、幅径、角度、また両眉間と両眼間を計測し、更に眼の総面積に対する黒眼面積比、眼開大径に対する黒眼径の比を求めて左右別に最大、最小、平均、標準偏差を“表1”に示した。

2. 眉、眼の類型化

顔型と個性との関係を知るための官能検査を行なうにあたり、その試料を得るために“表1”に示した右の眉及び眼の標準偏差 $\pm 3\sigma$ を用いて類型化を試みた。なお右の眉、眼を用いたのは、既報により両者の各因子が左右間におのおのの高い相関関係を示したので、左右いずれを用

表1 眉・眼の計測値

計測部位		計測値	MAX	MIN	MEAN	S. D
眉・投影長 (cm)	右		5.30	3.40	4.30	0.388
	左		5.40	3.20	4.25	0.417
眉・実長 (cm)	右		5.64	3.44	4.45	0.421
	左		5.80	3.40	4.41	0.448
眉 幅 (cm)	右		1.00	0.30	0.63	0.145
	左		1.00	0.26	0.63	0.148
眉 角 度 (°)	右		14.50	-14.00	0.80	4.961
	左		13.80	-11.00	0.81	4.852
眼 裂 長 (cm)	右		3.60	2.60	3.10	0.222
	左		3.70	2.48	3.01	0.228
眼開大径 (cm)	右		1.36	0.54	0.97	0.144
	左		1.58	0.56	0.97	0.153
眼 角 度 (°)	右		19.50	- 3.00	7.07	3.682
	左		20.00	- 5.50	7.21	3.536
両 眉 間 (cm)			4.00	1.60	2.88	0.509
両 眼 間 (cm)			4.60	2.50	3.78	0.338
黒眼面積/眼総面積			0.80	0.30	0.56	0.093
黒 眼 径/眼開大径			1.00	0.67	0.97	0.064

いてもよいが本研究では右を取りあげることにした。類型化については眉と眼に分けて次に述べることにする。

2-1 眉長，眉幅による類型化

眉長，眉幅の標準偏差を用いておのおの5段階に分類し，両者を組み合わせて類型化を試み“図2”に示した。これは紀要25号に報告したものであるが，この中から官能検査の試料として1-1，3-1，3-3，2-4，5-4の大，中，小を含む5種類の眉を選ぶことにした。

2-2 眼裂長，眼開大径による類型化

眉長 眉幅 (実長) (太さ)		眉長				
		1 3.19 ~ 3.69	2 3.70 ~ 4.20	3 4.21 ~ 4.71	4 4.72 ~ 5.22	5 5.23 ~ 5.73
1	0.19	0.7%	1.4%	0.7%		
	0.36					
2	0.37	2.1%	8.5%	9.2%	1.4%	
	0.54					
3	0.55	1.4%	16.9%	29.6%	10.6%	2.8%
	0.72					
4	0.73		1.4%	8.5%	1.4%	2.8%
	0.90					
5	0.91				0.7%	
	1.08					

図2 眉長，眉幅による類型化と出現率


















眼開 大径		眼裂長				
		1 2.43 ~ 2.69	2 2.70 ~ 2.96	3 2.97 ~ 3.23	4 3.24 ~ 3.50	5 3.51 ~ 3.77
1	0.38		0.4%		0.4%	
	0.61					
2	0.62	0.4%	9.4%	7.2%	2.7%	0.4%
	0.85					
3	0.86	0.4%	15.2%	29.1%	8.1%	1.8%
	1.09					
4	1.10	0.4%	3.1%	10.3%	8.1%	1.8%
	1.33					
5	1.34					0.4%
	1.57					

図3 眼裂長，眼開大径による類型化と出現率

眼の場合には眼裂長，眼開大径の標準偏差を用いて類型化を試み“図3”に示した．この中からは2-1，3-3，5-5の3種類を選んだ．














2-3 黒眼面積比と眼裂長による類型化

黒眼面積比と眼裂長の標準偏差を用いて類型化を試み“図4”に示したが，出現したのは17類型であり，出現率は図中に示した通りである．なお類型別に複合図として表わすことは，形

眼裂長 面積比		眼裂長				
		1 2.43 ~ 2.69	2 2.70 ~ 2.96	3 2.97 ~ 3.23	4 3.24 ~ 3.50	5 3.51 ~ 3.77
1	0.271			3.2%	0.9%	
	0.389					
2	0.390	0.5%	5.8%	13.0%	8.5%	0.5%
	0.500					
3	0.501		9.9%	23.0%	8.5%	
	0.611					
4	0.612		4.0%	14.0%	4.9%	
	0.722					
5	0.723	0.5%	0.9%	1.4%	0.5%	
	0.833					

※黒眼面積比... $\frac{\text{黒眼の面積}}{\text{眼の総面積}}$

図4 黒眼面積比，眼裂長による類型化と出現率

眼裂長 面積比		眼裂長				
		1 2.43 ~ 2.69	2 2.70 ~ 2.96	3 2.97 ~ 3.23	4 3.24 ~ 3.50	5 3.51 ~ 3.77
1	0.271			8.3%		
	0.389					
2	0.390		15.2%	16.7%	4.2%	5.6%
	0.500					
3	0.501	1.4%	8.3%	16.7%	11.1%	2.8%
	0.611					
4	0.612		1.4%	6.9%	1.4%	
	0.722					
5	0.723					
	0.833					

※黒眼面積比... $\frac{\text{黒眼の面積}}{\text{眼の総面積}}$

図5 黒眼面積比，眼裂長による類型化と出現率(三白眼)

が不明瞭となるので各1例を示すことにした。この中からは1-2, 3-3, 5-4を試料として選んだ。

2-4 黒眼面積比と眼裂長による類型化 (三白眼)

次に三白眼は個性との関係が考えられるので、前記と同様に黒眼面積比と眼裂長とを用いて類型化を試み“図5”に示したが、ここでも分類別に各1例を示した。なお三白眼の出現率は全体の32%であり、類型別には図中に示した通りである。この中からは1-3, 3-3, 5-3の3種類を選んだ。

3. 官能検査

3-1 官能検査の試料 (眉)

先に述べた眉の官能検査の試料について眉長、眉幅、眉角度、眉の明度をおのおの“表2”に示したが、眉の類型化の中から選んだ5種類の眉の眉長、眉幅は表に示した通りである。なおこの場合には、眉の太さによる官能値を見ることを目的としたので、眉角度は平均値の0.80°と一定にした。

次に上り眉と下り眉の眉長と眉幅は平均値の1/2大である2.20cmと0.32cmとし、眉角度は上り眉を最大値の14.50°、下り眉を-14.00°とした。

次に俗に言うへの字眉、三日月眉も試料として加えたが眉長、眉幅は2.50cmと0.32cmとし、また眉角度は平均値の0.80°とした。

以上の眉に明度N1.5, N4, N6.5の3種類をおのおの組み合わせて27種類の試料を作成した。なおカッコ内の数値は実物大の値である。

3-2 官能検査の試料 (眼)

眼の官能検査の試料として、先に述べた類型化の中から選んだ3種類の試料の眼裂長、眼開大径、黒眼面積/眼の総面積、及び黒眼径/眼開大径について“表3”に示した。

5-5の眼の眼裂長と眼開大径は1.80cmと0.70cm、また3-3の眼は1.55cmと0.49cm、2-1の眼は1.30cmと0.27cmである。

次に眼角度の最大値20.00°、最小値-3.00°、平均値7.07°を、3種類

表2 官能検査試料表 (眉)

試料番号	分類	眉長(cm)	眉幅(cm)	眉角度(°)	眉の明度
1	5-4	2.70 (5.40)	0.45 (0.90)	0.80	N 1.5
2					N 4
3					N 6.5
4	2-4	1.85 (3.70)	0.45 (0.90)	0.80	N 1.5
5					N 4
6					N 6.5
7	3-3	2.20 (4.40)	0.32 (0.64)	0.80	N 1.5
8					N 4
9					N 6.5
10	3-1	2.20 (4.40)	0.18 (0.36)	0.80	N 1.5
11					N 4
12					N 6.5
13	1-1	1.70 (3.40)	0.15 (0.30)	0.80	N 1.5
14					N 4
15					N 6.5
16	上り眉	2.20 (4.40)	0.32 (0.64)	14.50	N 1.5
17					N 4
18					N 6.5
19	下り眉	2.20 (4.40)	0.32 (0.64)	-14.00	N 1.5
20					N 4
21					N 6.5
22	への字眉	2.50 (5.00)	0.32 (0.64)	0.80	N 1.5
23					N 4
24					N 6.5
25	三日月眉	2.50 (5.00)	0.32 (0.64)	0.80	N 1.5
26					N 4
27					N 6.5

の眼におのおの組み合わせで9種類の試料とし、なお眼の総面積に対する黒眼面積比の最大値0.80、最小値0.30、平均値0.56を先に述べた9種類の試料に組み合わせで27種類とした。

次に眼開大径に対する黒眼径の比の1.00と0.70の眼を27種類に更に組み合わせで54種類の試料を作成した。なお0.70の眼とは眼開大径を1.00とした場合の黒眼径の比を示し、黒眼の下に白眼が見える三白眼であり、1.00の眼は、三白眼に対する普通の眼である。

官能検査では眉及び眼をおのおの1/2大とし、白紙にプリントした一定の顔型の中に左右対称に描き、眉、眼別の試料を作成した。一定の顔型とは既報の研究により、最も出現率が高かった卵型で、長径、幅径が平均値的な顔型であり、これも1/2大とした。

3-3 眉の官能値

官能検査の場合のパネラーは、本学短期大学部服飾専攻の学生107名とし、評価の方法はSD

表3 官能検査試料表(眼)

試料番号	眼裂長(cm)	眼開大径(cm)	眼角度(°)	黒眼の面積 眼の総面積	黒眼径 眼開大径	試料番号	眼裂長(cm)	眼開大径(cm)	眼角度(°)	黒眼の面積 眼の総面積	黒眼径 眼開大径		
1	1.80 (3.60)	0.70 (1.40)	20.00	0.80	0.70	28	1.55 (3.10)	0.49 (0.97)	7.07	0.56	1.00		
2					1.00						29	0.30	0.70
3				0.56	0.70					30			1.00
4					1.00						31	0.70	
5				0.30	0.70					32			1.00
6					1.00						33	0.56	
7			0.80	0.70	34	0.30	0.70	1.00					
8				1.00					35	0.80	0.70	1.00	
9			0.56	0.70	36	1.00	20.00	0.70					
10				1.00					37	0.30	0.80	1.00	
11			0.30	0.70	38	1.00	0.56	0.70					
12				1.00					39	0.80	0.70	1.00	
13			0.80	0.70	40	1.00	0.30	0.70					
14				1.00					41	0.80	0.70	1.00	
15			0.56	0.70	42	1.00	7.07	0.56					
16				1.00					43	0.30	0.80	0.70	
17			0.30	0.70	44	1.00	-3.00	0.70					
18				1.00					45	0.80	0.70	1.00	
19	0.80	0.70	46	1.00	2-1	0.70							
20		1.00					47	0.30	0.80	0.70			
21	0.56	0.70	48	1.00	7.07	0.56							
22		1.00					49	0.30	0.80	0.70			
23	0.30	0.70	50	1.00	-3.00	0.70							
24		1.00					51	0.80	0.70	1.00			
25	0.80	0.70	52	1.00	7.07	0.30							
26		1.00					53	0.56	0.70	1.00			
27	0.56	0.70	54										

表4 眉の平均官能値

分類	眉角度	眉の明度	官能値							試料番号	分類	眉角度	眉の明度
			最も強い	強い	やや強い	どちらでもない	やや弱い	弱い	最も弱い				
5-4	MEAN	N 1.5		1	5-4 (1.46)	MEAN (-0.07)	N 1.5 (2.01)						
		N 4		2			N 4 (1.48)						
		N 6.5		3			N 6.5 (0.89)						
2-4	MEAN	N 1.5		4	2-4 (0.27)	N 1.5 (0.84)							
		N 4		5		N 4 (0.52)							
		N 6.5		6		N 6.5 (-0.56)							
3-3	MEAN	N 1.5		7	3-3 (-0.01)	N 1.5 (0.31)							
		N 4		8		N 4 (0.21)							
		N 6.5		9		N 6.5 (-0.54)							
3-1	MEAN	N 1.5		10	3-1 (-0.56)	N 1.5 (-0.54)							
		N 4		11		N 4 (-0.19)							
		N 6.5		12		N 6.5 (-1.00)							
1-1	MEAN	N 1.5		13	1-1 (-1.56)	N 1.5 (-1.42)							
		N 4		14		N 4 (-1.50)							
		N 6.5		15		N 6.5 (-1.75)							
上り眉	MAX	N 1.5		16	上り眉 (2.03)	MAX (2.03)	N 1.5 (2.03)						
N 4	17	N 4 (2.12)											
N 6.5	18	N 6.5 (1.94)											
下り眉	MIN	N 1.5		19	下り眉 (-1.46)	MIN (-1.46)	N 1.5 (-1.10)						
N 4	20	N 4 (-1.27)											
N 6.5	21	N 6.5 (-2.00)											
への字眉	MEAN	N 1.5		22	への字眉 (1.44)	MEAN (0.88)	N 1.5 (1.89)						
三日月眉	MEAN	N 4		23			N 4 (1.78)						
		N 6.5		24			N 6.5 (0.65)						
		N 1.5		25	N 1.5 (0.09)								
三日月眉	MEAN	N 4		26	三日月眉 (0.31)	N 4 (0.10)							
		N 6.5		27		N 6.5 (0.75)							

図6 官能値 (眉)

法を用い、両極性評定尺度は“図6”に示す最も強いから最も弱いまでの7段階とした。なお試料はランダムに並べ、検査者各自がアンケート用紙に記入する方式とした。

以上の官能検査の結果を、最も強いを3、最も弱いを-3、どちらも無いを0とし、それらを含む7段階の尺度を数値化して平均官能値を求め、“表4”に示し、更に“図6”に線グラフで表わした。

縦軸には分類、眉角度、眉の明度を、横軸には評価の尺度を示した。

5-4の眉の平均官能値は1.46であり、5種類の眉の中では最も強いと感じた者が多かった。

また2-4、3-3、3-1、1-1の官能平均値は0.27、-0.01、-0.56、-1.56であり、グラフで見られるように多少の凹凸はあるが、やや強いから弱いへの分布の流れが認められた。また上り眉と下り眉を比較した場合には、上り眉の平均値は2.03、下り眉の平均官能値は-1.46であり、下り眉より上り眉の方が強いという結果であった。

なお、への字眉と三日月眉の平均官能値は、1.44と0.31であり、三日月眉よりへの字眉の方

()内は平均官能値

が強いと感じた者が多かった。

また眉の明度の記号は数値が小であるほど暗いことを示し、その官能値は2、3の例外はあるが、低明度の眉は高明度の眉より強いという傾向であった。

なお全体の中で最も強い眉はN4の上り眉であり、最も弱い眉はN6.5の下り眉であった。

3-4 眼の官能値

眼の場合には54種類の試料を用いて官能検査を行なったが、方法は眉の場合と同様とし、検査の結果を“表5”及び“図7”に示した。

縦軸には分類別の眼を、また黒眼面積/目の総面積、更に黒眼径/眼開大径を示した。その欄のaとは“表3”で示した黒眼径の比0.70の三白眼であり、bとは1.00の普通の目である。ま

表5 眼の平均官能値

試料番号	眼裂長 眼開大径	眼 角 度	黒眼の面積 目の総面積	黒 眼 径 眼開大径	試料番号	眼裂長 眼開大径	眼 角 度	黒眼の面積 目の総面積	黒 眼 径 眼開大径
1	MAX (0.35)	MAX (1.63)	MAX	a (1.61)	28	MEAN (0.56)	MEAN	MEAN (0.26)	b(-0.15)
2			(1.27)	b (0.94)	29		MIN	a (1.26)	
3			MEAN	a (1.65)	30		(0.75)	b (0.24)	
4			(1.76)	b (1.87)	31		MAX	a(-0.12)	
5			MIN	a (2.08)	32		(-0.32)	b(-0.52)	
6			(1.86)	b (1.65)	33		MEAN	a(-0.19)	
7		MEAN (0.29)	MAX	MAX	a (0.27)	34	MIN (-0.43)	(-0.56)	b(-0.94)
8				(0.25)	b (0.23)	35		MIN	a(-0.26)
9				MEAN	a (0.63)	36		(-0.40)	b(-0.53)
10				(0.37)	b (0.12)	37		MAX	a (1.05)
11				MIN	a(-0.02)	38		(1.08)	b (1.12)
12				(0.24)	b (0.50)	39		MEAN	a (1.64)
13		MIN (-0.87)	MAX	MAX	a(-0.94)	40	MAX (1.35)	(1.47)	b (1.30)
14				(-0.96)	b(-0.98)	41		MIN	a (1.67)
15				MEAN	a(-0.86)	42		(1.49)	b (1.31)
16				(-0.91)	b(-0.96)	43		MAX	a(-0.19)
17				MIN	a(-0.87)	44		(-0.51)	b(-0.83)
18				(-0.75)	b(-0.63)	45		MEAN	a (0.52)
19	MEAN (0.07)	MAX	MAX	a (1.75)	46	MIN (-0.07)	(-0.17)	b(-0.86)	
20			(1.68)	b (1.62)	47		MEAN	a (0.52)	
21			MEAN	a (1.87)	48		(-0.21)	b(-0.12)	
22			(1.72)	b (1.57)	49		MAX	a(-0.65)	
23			MIN	a (1.95)	50		(-1.25)	b(-1.86)	
24			(1.94)	b (1.92)	51		MEAN	a(-0.94)	
25	MEAN (0.56)	MAX	MAX	a (0.87)	52	MIN (-1.41)	(-1.33)	b(-1.71)	
26			(0.72)	b (0.58)	53		MIN	a(-1.26)	
27			MEAN (0.26)	a (0.67)	54		(-1.65)	b(-2.03)	

()内は平均官能値

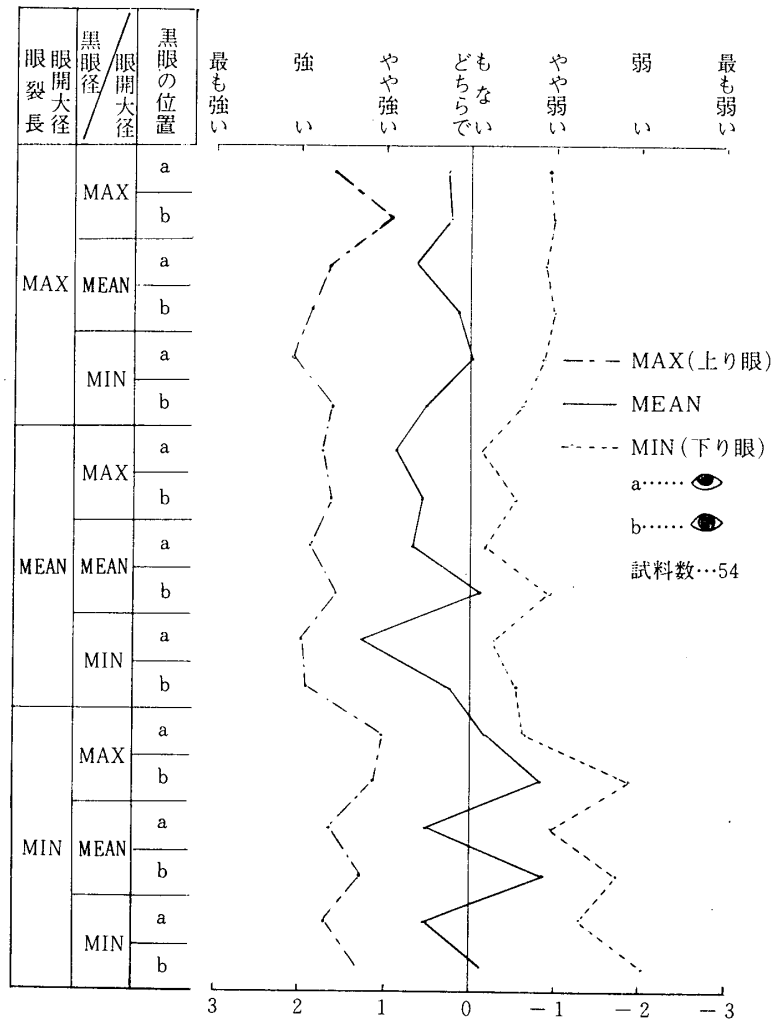


図7 官 能 値 (眼)

た横軸には評価の尺度を示した。

線グラフは眼角度の最大値（上り眼）を破線，最小値（下り眼）を点線，平均値（水平位に近い眼）を実線とし，ここでは眼角度の3種類の眼を主軸として官能値を見ようとしたものである。

強いという傾向を示したのは角度が大の上り眼の場合で，その平均官能値は1.59であり，一方弱いという傾向を示したのはマイナスの角度を持つ下り眼で平均官能値は-0.89であった。また眼角度が平均値の眼はどちらでもないという傾向であった。

以上のように54種類の眼は眼角度以外の他の因子の条件にかかわらず，眼角度の大，中，小によって強い，弱い傾向に分けられた。

なお因子別に検討してみると，眼裂長，眼開大径が大の5—5の眼の平均官能値は0.35，最小値2—1の眼は-0.07，平均値3—3の眼は0.64であった。

また5—5の眼の黒眼面積比が最大の場合の平均官能値は0.19，最小の場合は0.45，平均の場合は0.41であり，また3—3の眼の黒眼面積比が最大の場合の平均官能値は0.70，最小の場合は0.76，なお2—1の黒眼面積比が最大の場合は-0.23，最小の場合は0.02，平均の場合は-0.01であり，多少の例外はあるが，黒眼面積比が小の場合の方が大の場合より強いという傾向が認

められた。

なお全体の中で最も強いという傾向であったのは5—5の眼、つまり眼裂長、眼開大径が大の上り眼で黒眼面積比が小、つまり三白眼であった。一方最も弱いという傾向を示したのは2—1の眼つまり眼裂長、眼開大径が小の下り眼で、黒眼面積比が小のbの普通の眼であった。

次に三白眼と普通の眼をとりあげて比較検討するために“図8”に官能値を示したが、三白眼を実線、普通の眼を点線で表わした。

図でみられるように多少の例外はあるが、全体の流れとしては普通の眼より三白眼の方が強いという傾向であった。

3—5 官能値の重回帰係数

眉及び眼の官能検査の結果について述べてきたが、各形態的因子が官能値にどの程度影響したかを比較検討するために重回帰分析によって数量化を試み、回帰係数及び標準化回帰係数を求めて“表6”に示した。

眉の場合に標準化回帰係数が最も大であったのは眉角度の0.704であり、眉角度は強い、弱いを感じ方の度合を表わす官能値に大きく影響していることが認められた。次いで眉幅の0.417、眉長の0.366であった。なお最も小であったのは眉の明度の-0.299であった。

眼の場合の標準化回帰係数が最も大であったのは眼角度の0.898であり、官能値への影響度が大き

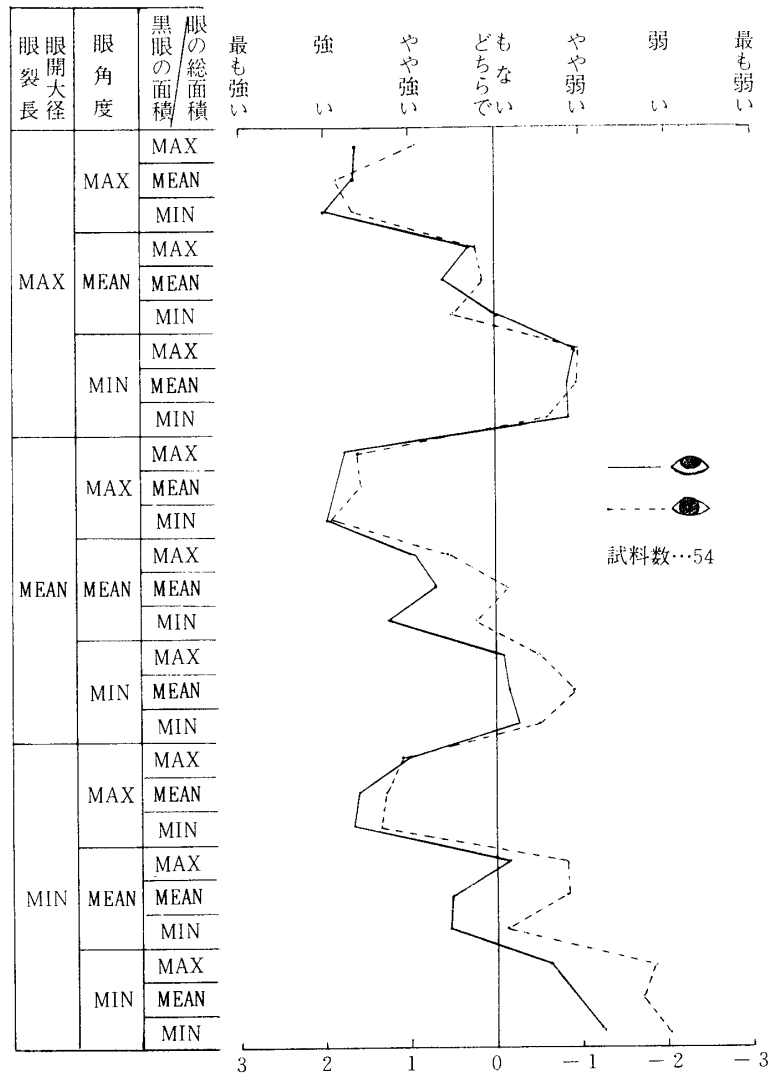


図8 官能値 (眼)

表6 重回帰係数

〈眼〉			〈眉〉		
説明変数	係数	回帰係数	説明変数	係数	回帰係数
眼裂長		0.416	眉長	1.508	0.336
眼開大径		0.497	眉幅	5.082	0.417
眼角度		0.107	眉角度	0.122	0.704
黒眼の面積/目の総面積	-0.329	-0.060	眉の明度	-0.148	-0.229
黒眼径/開眼大径	-1.405	-0.188			

あった。次いで黒眼径/眼開大径の -0.188 であり、また眼開大径は 0.098 、眼裂長は 0.076 であり、最も小であったのは黒眼面積比の -0.060 であった。なお表中のマイナス記号は、例えば黒眼径の比の場合、黒眼径の比が小になるほど官能値は大となることを意味している。以上の官能値の重回帰係数は、先に述べた“図7”及び“図8”で示した官能値の傾向を裏付けている。

次に官能検査の試料の一部を写真によって例示することにした。

3-5 官能検査の試料例

3-5-1 眉の形態・例1

眉の形態・例1は、先に述べた“図2”の眉の類型化の中から選んだ5-4、3-3、1-1の眉型であるが、官能検査の結果では5-4の眉は3-3や1-1の眉よりも強いと感じた者が多かった。

下の写真はN1.5、N6.5の眉であるが、N1.5の低明度の方が、N6.5の高明度の眉より強いという結果であった。

3-5-2 眉の形態・例2

例2では眉の形態の中で眉角度 13.00° の上り眉、 -10.00° の下り眉を示したが、下り眉よりも上り眉の方が強いと感じた者が多かった。

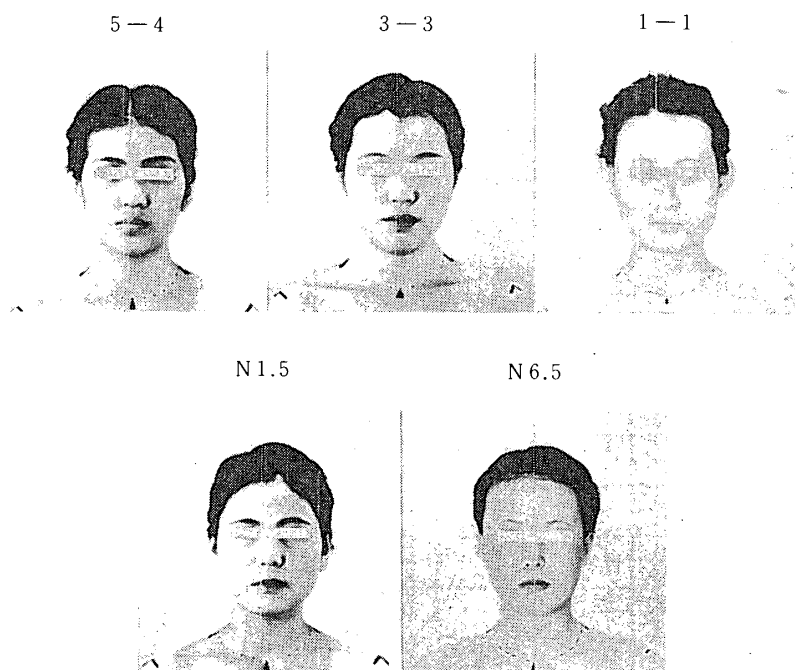


図9 眉の形態・例1

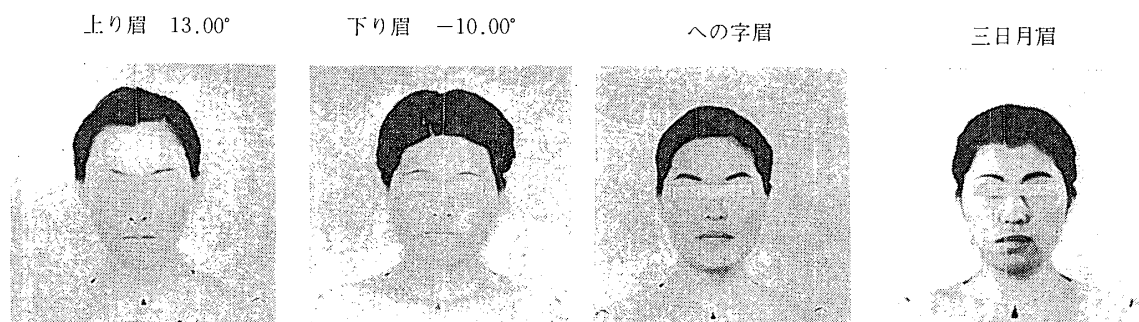


図10 眉の形態・例2

また、への字眉と三日月眉の場合では、への字眉の方が強いという結果であった。

3—5—3 眼の形態・例1

眼の形態では先に述べた“図3”の眼の類型化の中から選んだ5—5，3—3，2—1の眼であるが、眼裂長，眼開大径が大の眼の方が小の眼より強いと感じた者が多かった。

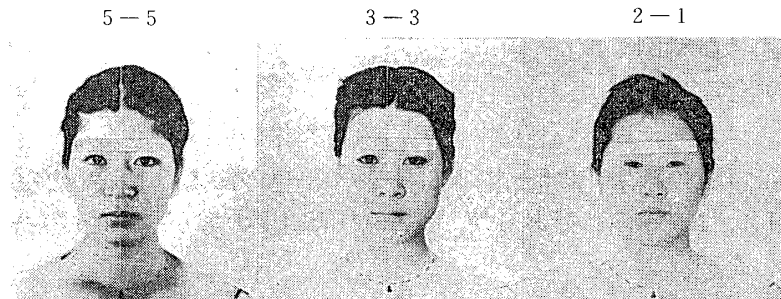


図11 眼の形態・例1

3—5—4 眼の形態・例2

眼の形態の中で眼角度が 16.00° の上り眼， -3.00° の下り眼を例示したが，下り眼よりも上り眼の方が強いと感じた者が多く，また眼開大径に対する黒眼径の比が0.85の三白眼は1.00の普通の眼よりも強いという結果であった。

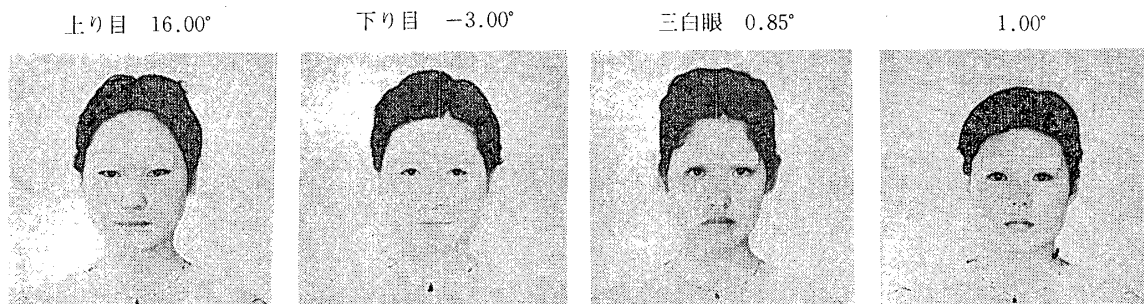


図12 眼の形態・例2

要 約

人の個性と被服との適合関係を知るための基礎研究として顔の形態的因子の中で先ず眉及び眼を取りあげ，個性との関係について官能検査を行なった。

1. 眉の官能値

本学短期大学生 222 名の眉長，眉幅を計測し，標準偏差を用いて類型化を試み，その中から大，中，小を含む 5 種類の眉を選び，眉角度は平均値の 0.80° とし，眉の明度の 3 種類を組み合わせた 15 種類の試料を作成した。また上り眉と下り眉を 6 種類，への字眉と三日月眉を 6 種類，合計 27 種類を官能検査の試料とした。

検査者は本学短期大学部服飾専攻の学生 107 名とし，評価の方法は SD 法を用い，両極性評定尺度は最も強いから最も弱いまでの 7 段階とした。

検査の結果を数値化して平均官能値を求めたところ，眉長，眉幅ともに大の眉は強いと感じ，逆に両者ともに小の眉は弱いと感じた者が多かった。

なお眉角度が小の下り眉より眉角度が大の上り眉の方が強く，また三日月眉よりへの字眉の方が，高明度より低明度の眉の方が強く感じるという結果であった。

2. 眼の官能値

眼裂長と眼開大径による類型化の中から大, 中, 小の3種類の眼を選び, 眼角度の大, 中, 小を組み合わせて9種類とし, 更に黒眼面積比の大, 中, 小を組み合わせて27種類とした。また三白眼と普通の眼をおのおの組み合わせて合計54種類の試料を作成した。

以上の試料を用いて官能検査を行なったがその結果, 強いという傾向を示したのは角度が大の上り眼の場合であり, 一方弱いという傾向を示したのはマイナスの角度を持つ下り眼の場合であった。また三白眼と普通の眼を比較した場合には, 三白眼の方が強いという結果であった。

3. 官能値の重回帰係数

眉及び眼の各形態的因子が, 官能値にどの程度影響したかを比較検討するために重回帰分析によって数量化を試み, 回帰係数及び標準化回帰係数を求めたが, 眉の場合に最も大であったのは眉角度の0.704, 眼の場合に大であったのは眼角度の0.898であり, 強い弱いの感じ方の度合いを表わす官能値に大きく影響していることが認められた。次いで眉幅, 眉長, 眉の明度の順であった。なお眼裂長, 眼開大径, 及び黒眼面積比, 黒眼径の比は官能値への影響は小の傾向が認められた。

以上眉及び眼の官能検査の結果について報告したが, 顔の形態的因子には, 鼻, 口, 及び顔の外郭線などの形態があり, また皮膚の色も無視することはできない。今後はこれらについて段階を追って検討を進めたいと考えている。なお顔の形態的個性についてある程度の手がかりを得ることができたら, 次に被服の着装効果との関係についての研究へと発展させたいと考えている。終わりに本研究に被験者として協力して下さった服飾専攻の学生に謝意を表します。

参 考 文 献

- 1) 柄原他2名:名古屋女子大学紀要, 20, 71 (1974)
- 2) 中尾喜保:生体の観察, 248-251, 260, フレンド社 (1965)
- 3) 中尾喜保:被服のためのキネジオロジイ, 21, 102-104, 人間と技術社 (1973)
- 4) 日本人間工学会衣服部会:被服と人体, 71-72, 人間と技術社 (1970)
- 5) 人間工学人体計測編集委員会:人体計測値図表, 28-29, 81-91, 人間と技術社 (1970)
- 6) 柄原他2名:日本人間工学会誌, 12, No. 3, 82 (1976)
- 7) 柄原他3名:名古屋女子大学紀要, 25, 1-12 (1979)
- 8) 日科技連:官能検査ハンドブック, 26-28, 45-47, 日科技連出版社 (1975)
- 9) 奥野他共著:多変量解析法, 日科技連出版社 (1971)